

1860年と1861年という文筆活動の出発期にあたるレスコフの諸論文には「人間的自由の権利をあくまで尊重する」(レスコフ)という姿勢があり、それとのつながりが出てくる「するどい現実批判」、「分離派教徒の生活や農村共同体への深い関心」、「新しい歴史をつくる移住民の生活への期待」といった要素を、その特徴として見ることができる。当時のレスコフの文筆活動の基本姿勢は、この時期のレスコフが若き日のブイコフに語った「私はあるがままの人生を人びとに示すように努めている」という言葉が、それをもっとも的確にあらわしていると思われる。

(付記)

この発表のあと、オリョール教育大学のグローモフ氏により以下の事実が明らかにされている。レスコフは1861年5月に В. А. Бец と共編で38ページよりなる小冊子『英国公衆衛生法発展史』を作成しはこれは『現代医学』紙の付録として購読者に無料配布(一部は有料でも販売)された。またレスコフは、報告者が作成した目録のほか、1861年9月14日付『ロシヤのことば』紙(第74号)にも国内展望の記事を寄せており、そこでこの小冊子の内容に言及しているとのこと。См. ст. В. Громова “Первая книжка Лескова”(“Орловский комсомолец” № 211, 1 ноября 1980 г., стр. 4)

『狂人日記』の作品構造をめぐって

秦 野 一 宏

しがない42歳の九等官が、思いをよせていた局長令嬢との結婚の夢を破られ、あぐくの果てに、狂気の中で「スペイン」国王になってしまう。これが『狂人日記』である。本稿の目的は、そこに展開される情熱の弁証法がどのような作品構造を背景にしてうちたてられているのか、主として機能上の問題に焦点を絞って探りだそうとするところにある。

*

ポプリーシチンは「変身」する。ゴーゴリは、「変身」を準備する前段階としての大きな時間をもち込もうと日付を工夫した。たとえば、『狂人日記』の記述が10月3日、4日と続いた後、約ひと月とんで11月6日に移るのはまさにその工夫の結果である。

令嬢のあとをつけまわすというほぼ同じ内容を盛りこんだ10月4日の最後と11月6日の最初の記述に注意されたい。点と点とを読みながら、読者は線として把握する、つまり、ポプリーシチンがひと月余りも同じ行動を繰り返しているのを察するだろう。同様のことが11月13日と12月3日の記述についても確認できる、ただし、今度は、以前とは違った新たな平衡(結婚への希望を失ってしまひましきの募る状態)を示しているのであるが……

さて、それでは、ポプリーシチンが変わることそのものはどう表わされているのだろうか。ここにもやはり日付が関わっている(たとえば2000年4月43日というような日付)。しかしながら、変化の微妙な点は

何より句・語レベルで表わされよう。具体的に言うならば、繰り返される語句の消失、あるいは意味の変質などがそれにあたる。前者の一例としては「何でもない、何でもない、沈黙」、後者の一例としては《политика》。この《политика》には一言、説明を加えておく必要がある。最初、この語は、「驚ペン削り」をして局長のお気に入りになろうというポプリーシチンの心理を反映して、「権謀術策」という意であられるが、後には、これに加えて「政治」という意味のアクセントが強くなり出されてくるようになる。そこには、局長・令嬢にまつわる小さな問題から「スペイン」に関する大きな問題へと移る、ポプリーシチンの心理の連続と非連続とが同時に映し出されているのである。

次に、ポプリーシチンの変化に関わって最も重要な役割を果たしている「犬の手紙」についてみてゆきたい。がそのためには、まず「序文」の問題にふれておく必要がある。

『狂人日記』は「10月3日 きょうはずいぶん変わったでき事があった。」という突如とした一節ではじまる。狂人の日記という特殊なゾーンに入るに際し、読者には何らのコメントも用意されていない。日記を書きつけ終えた『今』（すなわち、『狂人日記』を印刷し、出版する側からみた今）についての言及もない。読者としては、日記を書きつけつつある主人公の「今」をそのまま直接、あいまいに迎えてゆくしか手はないのだ。作品の時空は明らかに開かれている。そして、開かれた時空なればこそ「犬の手紙」を導入することが可能なので

ある。

この手紙は、局長・令嬢に愛玩される犬にしか知りようのない事実を暴露する。そのもろもろの事実によってポプリーシチンの夢はうち砕かれてしまうわけであるが、そうした超自然的要素にもまして、手紙を自分の日記に書きつけてゆく作業は異様である。いや、時折自分が洩らす感想まで書きつけるなど、この文脈上、ありえない。しかし、この「ありえない」設定が非常に大きな役割を果たしているのである。ここでも先述した「大きな時間」がとり込まれていることに注意したい。「春の近づきが感じられるわね」という一節から、この文通はポプリーシチンの日記のはじまる10月3日よりずっと前から続けられていたことがわかる。ポプリーシチンは、手紙をとばしとばし読むことで、「大きな時間」を自らの「今」とからみ合わせるのだ。つまり、彼は、思わせぶりにハンケチを落とした令嬢の行為、威厳のある局長の口のきき方、驚ペン削りなど、その他多くの事象のもっていた意味の総体に対して、再解釈を行いながらそれを「今」に組込んでゆくのである。ここにポプリーシチンの変化をつくりあげる重要な作品構造上の意味がある。

*

以上、述べてきたことは、『外套』の作品構造と比較することによってより大きな意味をもつだろう。拙稿「読者論——ゴゴリの『外套』についての一考察——」(早稲田大学大学院文学研究科『文学研究科紀要 別冊第七集』, 1980) 年を参照していたければ幸いである。